



稲穂

豊崎小学校 校長室通信

令和6年 3月 1日

第11号 文責 久保 亨



子どもを「丸ごと受け止める」会話を



あっという間に、6年生の皆さんはもうすぐ卒業する季節となりました。昨日行われた6年生を送る会は、1～5年生の皆さんの感謝の気持ちが伝わる素晴らしい会となりました。私からも、6年生の皆さんにこれまでの頑張りへのお礼を述べ、残り少ない小学校生活を悔いのないよう過ごしてほしいというお話をしました。

さて、ご家庭では、お子さんとの会話は弾んでいるでしょうか。特に、高学年となってくると、「子どもが話をしてくれなくなった。」ということもよくあることだと思います。日本精神療学会理事長の松本文男さんによると、親がついついしてしまう「NGな聴き方」があると言います。「うちの家では会話があるから大丈夫」という方もいらっしゃると思いますが、普段の会話を振り返っていただければと思います。

ついついやってしまう「NGな聴き方」



①親が聴きたい話だけをさせる

子どもが今日あったことを話しているのに、「授業はどうだった?」「友達とはケンカしてない?」などと親が知りたいことだけを聴く。



②適当なあいづちで聴き流す

忙しい時に、視線を合わさずに「へえ」「ふうん」といった気のないあいづちをしながら聴き流す。



③子どもの話を乗っ取る

話している途中なのに言葉遣いの間違いを正したり、「こういうことね」と話をまとめたりする。



④子どもに指示やお説教をする

話に気になるところがあると、「ダメじゃない」「こうすればよかったのに」とお説教をする。

こうした会話では、親がどれだけ子どもの話を聴いたつもりになっていても、子どもは「自分の伝えたいことを受け止めてもらった」という感覚は得られません。そして、だんだんに話をしたがるなくなる…ということになってしまいます。

親がついついお説教やアドバイスをしてしまうのは、愛情あつてのことだとは思いますが、親の欲求はひとまず全部棚上げして、まっさらな状態で子どもの話に向き合うことが大切だということです。

子どもの話が重要ではないように思えたり、忙しくて話を聴く余裕がなかったりすることもあると思いますが、子どもの話をしっかりと受け止めることが安心感・信頼感につながり、ひいては子どもの能力を育てることにもつながります。

機会があれば、「では、親はどのようなことを話せばいいの?」について考えてみたいと思います。

